

評価基準	
十分達成できている。	A
おおむね達成できている	B
どちらかという達成できていない	C
ほとんど達成できていない	D

重点目標Ⅰ 意欲ある学生の確保

評価項目	具体的方策・評価指標等	経過・実績	評価	次年度の課題と改善策	外部評価委員の意見
1 学生・研修生の応募者確保	<p>●具体的方策</p> <p>1 募集及び広報活動の強化</p> <ul style="list-style-type: none"> ・分かりやすく興味を持たれるような学校案内を作成する。 ・学校説明会の開催、各高校進路ガイダンスへの・出席、高校訪問等を行うとともに、オープンキャンパスを充実し、農業大学校について丁寧な説明を行う。 ・ホームページで学校の出来事などを積極的に情報発信する。 ・県広報誌をはじめ各市町や農業団体の広報媒体で学生・研修生募集記事を掲載する。 <p>2 就学支援制度のPRと条件整備</p> <ul style="list-style-type: none"> ・農業次世代人材投資事業、各種奨学金等、就農を目指す学生・研修生を支援する制度をPRする。 ・高等教育無償化等の修学支援実施に向けた条件整備と制度のPRを行う。 <p>3 選考方法や募集時期の見直し</p> <ul style="list-style-type: none"> ・技術研修科の募集にあたって、書類選考だけでなく面接選考を実施する。 ・定員に満たない場合は、再募集により応募期間を延長する。 <p>●評価指標</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 オープンキャンパス参加者数 2 担い手養成科応募者数 3 技術研修科応募者数 	<ul style="list-style-type: none"> ・学校説明会の開催や高校の進路ガイダンスへの出席等、様々な機会を通じて募集活動を実施した。 ・校長・副校長・学務担当が在校生の全出身高校を訪問した。 ・農大ホームページや県・市町・JA広報誌への掲載、公共施設（体育館等）などへのポスター掲示を行った。 ・活躍する卒業生、農大のできごとなどホームページを随時更新している。 ・オープンキャンパス（7/21、8/2、8/18+ふれあい市学校見学11/9）を実施し、参加生徒は延べ43名、父兄等は延べ32名。 ・令和2年度学生募集に対し、推薦入試19名、一般入試（前・後期）8名の応募があり、合格者は25名（うち入学辞退者3名）。 <ul style="list-style-type: none"> ・高等教育修学支援に向けた機関要件確認申請を提出し、要件を満たしていることが認定された。また、このことについて県及び農大ホームページで公表した。 ・農業次世代人材投資事業、各種奨学金、高等教育修学支援等について、学校説明会やオープンキャンパス等の機会等を捉えて、PRした。 <ul style="list-style-type: none"> ・技術研修科の元年度就農実践研修（1年コース）は14名が受講（定員15名）。 ・令和2年度研修生募集に対し、追加募集を含め11名の応募があり、全員合格（うち受講辞退者1名）。 ・就農準備研修（4か月コース）はⅠ期22名、Ⅱ期22名、Ⅲ期21名が修了した（定員各20名）。 ・令和2年度就農準備研修Ⅰ期の研修生は、14名の応募があり、12名が合格。 ・かがわMBA塾10名が受講し、9名が修了した。 ・農業機械利用技能者養成研修（大特、けん引）については、定員80名に対し受講希望者が134人と、要望を満たすことができない状況であった。 	<p>B</p> <p>A</p> <p>A</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・一般試験（後期）を残してはいるものの、入学者は今年度を大きく下回る模様。特に、花き園芸、造園緑化、畜産の希望者が少なく、野菜園芸、果樹園芸への偏りが大きい。コースの再編に向けてより具体的な検討を行うとともに、この状況が一過性のものであるか否かを検証することが必要である。 ・学生の確保に向けてはこれまでの取組みを引続き実施するほか、農業高校以外の高校生にも職業の選択肢として農業があることを、学校連携等を通じてより積極的にPRする。 <ul style="list-style-type: none"> ・農大の理解促進を図るため、学生募集だけでなく、授業内容や学校行事等に関する情報をわかりやすく提供する。 <ul style="list-style-type: none"> ・研修生の応募状況に応じて募集内容やコース編成等の見直しを行い、研修科の充実を図る。 ・かがわMBA塾については継続が困難な状況であるが、フォローアップ研修を利用して経営力向上に向けた支援を引続き行う。 ・農業機械利用技能者養成研修（大特、けん引）については、受講希望者の要望に応えるため、令和2年度からは予定していた回数3回から6回に、また、各回の定員も26名へと大幅に増やす（総定員数156名）。 	<ul style="list-style-type: none"> ・農大へ若者を集めるためには、「入学したらこのようなスキルが身につく」のように、アピールできる宣伝が必要。 ・農業に興味を持っている生徒でも、少しの不都合（学習環境の不備など）で興味が薄れてしまう。 ・学生募集をコース毎に行わない「くくり募集」も考える必要がある。

重点目標Ⅱ 教育内容の充実・強化と実践力の養成

評価項目	具体的方策・評価指標等	経過・実績	評価	次年度の課題と改善策	外部評価委員の意見
<p>1 カリキュラムの検討</p>	<p>●具体的方策</p> <p>1 教科別授業計画(シラバス)の整備と効果的な授業の実施 ・今日的課題に応じて毎年度の授業科目を見直す。 ・校外講師を含む全教科のシラバスを整備し、校外講師との連携を強化、学生の資質に応じた授業を実施する。</p> <p>2 就農・就職に向けた教科の効果的な実施 ・学生個々の希望に応じた就職支援を行う。 ・「就農就業ガイダンス」及び「現地研修」において、県農業経営者協議会法人部会と連携して県内農業法人経営者等と交流できる場をできるだけ多く設定する。</p> <p>●評価指標</p> <p>1 カリキュラムの見直し、新規教科の導入検討 2 農業経営者と直接交流できる授業の開催回数</p>	<p>・入学時の専攻コース希望状況や今日的課題の動向等を勘案し、コース再編を含め、校内の体制整備について検討を開始した。</p> <p>・県主催のアグリレディシンポジウム、GAP講習会等に学生を参加させ、農政の今日的課題について学ぶ機会を設けた。</p> <p>・現地研修を活用し、6次産業化事例として(株)東洋オリーブを見学するとともに、小豆島におけるオリーブ産業と地域のつながりについて学習した。</p> <p>・昨年度実施した校内会社説明会が、参加した法人、学生の双方から好評であったため、今年度は、5月30日に16社、10月2日に11社招き、2回実施した。</p> <p>・「就農就業ガイダンス」では、希望する進路が異なる学生の参考になるよう、雇用を希望する法人経営者や卒業後4年程度ですでに独立就農している農大OBなど、変化に富んだ人選を行った。</p> <p>・外部の就職支援機関(ハローワーク、四国ジョブカードセンター、全国労働基準関係団体連合会、エイジェック等)と連携し、専門家を講師として招くなど、より充実した就職支援を行った。</p>	<p>B</p> <p>A</p>	<p>・関係機関等が主催する研修会やシンポジウムに学生を参加させられるよう、関係機関との情報共有を図る。</p> <p>・鳥獣被害対策について、現在は農業基礎概論で2時限の座学として取り入れている。しかし、県全域で大きな問題となっていることから授業内容を拡充する必要があり、次年度は鳥獣被害対策演習(2単位)を新設し、実技、現地研修も含め実施する予定。</p> <p>・健康な社会生活を営むために必要な知識(メンタルヘルスや依存症、感染症、生産現場でのアレルギー等)を身に付けるため、従来の体育を保健体育に改め、2学年でも実施する。</p> <p>・学生が希望する進路に応じたきめ細かな指導を行うため、就農就業ガイダンスの一部を就農希望コースと就職希望コースに分けて実施する。</p>	<p>・県外の農大のカリキュラムも調べ、参考にさせていただきたい。</p> <p>・先輩を呼んで行うガイダンスを早めに実施した方が意識付けしやすいのではないかと。</p>
<p>2 教育内容の充実</p>	<p>●具体的方策</p> <p>1 就業先から求められる学生の能力向上 ・栽培管理から農業機械、経営管理に至る幅広い知識・技能の習得を促進する。 ・専攻実習や卒業論文、更には自主課題研修やコース別演習において、課題解決のための計画・実行・分析を行う能力を身につける。 ・表計算ソフトやプレゼンテーションソフトの活用、インターネットを活用した情報収集等により、情報処理能力の向上を図る。</p>	<p>・1学年は農家実習(16日間)を行い、生産現場を直接体験するとともに、その体験内容や今後の目標等について、報告会で発表した。</p> <p>・2学年は専攻実習(4月から2月まで週3日)において個々が課題を設定し、その成果を卒論としてまとめ、発表会で発表した。また、成績優秀者2名は中国四国地区ブロックプロジェクト発表会で代表として発表した。</p> <p>・1学年全員に将来の夢、農業に対する思いについて作文させ、代表2名が四国地区大会で発表した。</p> <p>・自分の意見や成果をまとめ、大勢の前で発表することにより、主体性やプレゼン能力の向上を図った。</p> <p>・農村を取り巻く環境について幅広い視点から考えられるよう、1学年で、新たに森林演習(2日間)を実施した。</p>	<p>A</p>	<p>・就職先から特に要望の高いコミュニケーション能力を高めるための取組みを、充実強化する必要がある。今年度に引き続き、グループワークを授業に積極的に取り入れるとともに、自治会活動を充実し、学生自らが意見や提案を取りまとめ実行する機会を増やす。</p>	<p>・コミュニケーション能力の改善は難しいと思う。</p>

評価項目	具体的方策・評価指標等	経過・実績	評価	次年度の課題と改善策	外部評価委員の意見
	<p>2 指導教官の資質向上</p> <ul style="list-style-type: none"> 各種研修会や研究活動に参加する。 最新の教育事情、学生指導、危機管理、コンプライアンス等に関する研修や情報交換等を実施する。 <p>3 教育改善計画検討委員会の開催</p> <ul style="list-style-type: none"> 教育改善計画検討委員会で出された意見をもとに、教育内容を積極的に見直しする。 <p>●評価指標</p> <ol style="list-style-type: none"> 卒業論文・自主課題研修の実施・発表学生数 研修参加回数及び延べ人数 教育改善検討委員会における意見聴取 	<ul style="list-style-type: none"> キャリアデザイン等の授業でグループワークを積極的に取り入れることにより、コミュニケーション能力の向上を図った。 野菜園芸コース教授を専門別ブロック研修会（8月）に、また、副校長（11月）及び教授1名（12月）を高度農業経営者育成教育機関が実施する指導力強化発展研修会に参加させるなど、研鑽に努めた。 高等教育修学支援新制度説明会や日本学生支援機構奨学金業務研修会、全国農業大学校長会、農業大学校教育研究会、中国四国ブロック農業大学校等教務・研修担当者等に職員を派遣し、情報収集や他県の農業大学校職員等との情報共有に努めた。 教育改善計画検討委員会を開催した。（8/22、1/13） 入学時の専攻コース希望状況や今日的課題の動向等を勘案し、コース再編を含め、校内の体制整備について検討を開始した。（再掲） 	<p>A</p> <p>A</p>	<ul style="list-style-type: none"> 今後も農大職員対象の研修に積極的に参加させるとともに、常に現場感覚を持った指導ができるように、普及職員対象の研修等にも参加させる。 カリキュラムを工夫し教授が自由に使える時間を設けることにより、より積極的な自己研鑽を図るとともに、学校運営や学生指導等について十分な検討が行えるよう教授会の充実を図る。 次年度も引続き教育改善計画検討委員会を開催し、委員からの意見聴取を行う。 校内の教授会や農場運営委員会等についても充実した協議が行えるよう、カリキュラムとの調整を行い計画的に実施する。 	
3 資格取得の支援	<p>●具体的方策</p> <ol style="list-style-type: none"> 就農や就職に有利な資格の取得促進 大型特殊免許や日本農業技術検定、農業簿記をはじめ、狩猟免許、危険物取扱者、毒物劇物取扱者資格試験、フォークリフト等各種資格の取得状況を整理し、情報提供と積極的な取得支援を行う。 造園緑化コースにおいては、実習を有効活用し、造園技能検定（1年生3級、2年生2級）の全員合格を目指す。 <p>●評価指標</p> <ol style="list-style-type: none"> 資格取得学生数(延べ) 	<ul style="list-style-type: none"> 次の免許・資格を取得した。（延べ80名） 農業技術検定 2級1名、3級17名 劇毒物取扱（一般） 1名 農業簿記 3級3名 大型特殊自動車（農耕車限定） 22名 けん引免許（農耕車限定） 5名 フォークリフト（1t以上） 3名 小型建機（3t未満） 1名 小型クレーン（5t未満） 2名 玉掛け（1t以上） 2名 刈払機取扱 4名 チェーンソー作業 7名 造園技能士 3級3名、2級1名 家畜人工授精師 8名 家畜商 5名 各種資格に関する情報提供と取りまとめ、合格に向けての指導を実施した。 	<p>A</p>	<ul style="list-style-type: none"> 次年度新設予定の鳥獣害対策演習で、猟友会との連携のもと、狩猟免許取得に向けた内容を盛り込む。 農業高校出身の学生と普通高校等出身の学生の農業に関する基礎知識の差を埋めるため、2年度入学予定者全員に農業技術検定3級のテキストを用いた事前学習を行わせるとともに、4月から実施する農業基礎概論の授業を3級合格を目標としたカリキュラムへと内容を修正する。 	

評価項目	具体的方策・評価指標等	経過・実績	評価	次年度の課題と改善策	外部評価委員の意見
<p>4 実践研修の充実</p>	<p>●具体的方策</p> <p>1 農場実習や専攻実習での自主的な取組みを促進</p> <ul style="list-style-type: none"> ・1年生には担当作物（果樹）の割り振りをするとともに、2年生には1年生への指導や作業計画の説明をさせることなどにより、責任感や指導力を身に付けさせる。 ・より多くの品目の栽培管理を経験させるとともに、生産現場で求められる基礎的な技術・能力の習得を目指す。 ・自ら調べる習慣、自主的に学習しようとする意識を醸成する。 <p>2 農業試験場で開発された新品種や新技術、県特産品目等を取り入れた実習の実施</p> <p>3 校外での実習体験の積極的な推進</p> <ul style="list-style-type: none"> ・専攻実習（2年生）は可能な限り校外で実施するとともに、校内実習を行っている学生もインターンシップ等で校外学習の機会を作り、人間性・社会性を育成する。 ・農家実習（1年生）を実施し、実際の農業生産の現場を経験することにより、目的意識や学習意欲の高揚を図る。 <p>4 校内直売所やイベント等を通じた販売体験の実施</p> <p>●評価指標</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 新技術や県特産品目の導入件数 2 学生全員の校外実習体験 3 販売体験の実施回数・アイテム数 	<ul style="list-style-type: none"> ・コース毎に学生が自主的に実習に取組めるよう工夫した。 ・1学年がコース毎に先進地研修を企画し、3月に実施する計画である。 ・農家実習や先進地研修の報告、卒論発表の運営等を通じて、先進事例・技術の情報収集やプレゼンテーション能力の向上に努めた。 <p>・年間を通じて県の主要品目を中心とした実習に取り組むとともに、モロヘイヤ新品種「さめきのヘイヤ」を新たに導入した（野菜27品目、花き46品目、果樹11品目）。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・専攻実習は13名が校外（先進農家6名、農業試験場3名、畜産試験場4人）、18名が校内で取り組んだ。 ・インターンシップは県内先進農家及び農業法人で5名が実施した。 ・農家実習は16日間（昨年度より1日増加）実施し、先進農家等16か所に各1～3名派遣した。 ・森林演習では、香川県森林センターにおいて、林分調査、植林用苗木育苗実習等を実施した。 <ul style="list-style-type: none"> ・校内直売所で毎週月・水・金曜日に販売するほか、ふれあい市の実施及び県農業フェア、農高フェス等に参加し、事前準備や接客を通じ、自ら生産した農産物を販売する喜び等を体験させた。 ・販売体験実施回数：校内97回、校外3回、アイテム数130種類 	<p>A</p> <p>A</p> <p>A</p> <p>A</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・学生がより主体的に取り組むとともに、1学年と2学年が役割分担し、コーチング技術の取得やリーダーシップを発揮できるよう、より実践的な実習の実施に努める。 ・校外での実習については、受け入れ先との連携を密にし、学生が課題解決などの目的意識を持った効果的な実習となるよう努める。 <ul style="list-style-type: none"> ・施設園芸については、導入コストの高さや技術習得の難しさ等から導入を躊躇する新規就農者は多い。香川県が中心となって開発した「ICTを活用した生産技術の高位平準化支援システム」を授業で体験することにより、施設園芸に安心して取り組めるよう、当システムに対応した栽培施設の設置や授業計画を検討中。 ・農業試験場が開発した新技術を、授業内容に積極的に取り入れるよう工夫する。 <ul style="list-style-type: none"> ・専攻実習や農家実習については、学生の意向を尊重しながら、関係機関等と調整を行う。 <ul style="list-style-type: none"> ・販売する農産物について、特徴や栽培方法、利用の仕方等を消費者に直接説明できるよう、日頃の実習等を通じて習得させる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・インターンシップは積極的に実施して欲しい。

重点目標Ⅲ 進路指導の充実と就業意欲の醸成

評価項目	具体的方策・評価指標等	経過・実績	評価	次年度の課題と改善策	外部評価委員の意見
<p>1 進路決定の指導・支援</p>	<p>●具体的方策</p> <p>1 個別の進路相談の実施と積極的な情報提供</p> <ul style="list-style-type: none"> 三者面談のほか学生との対話など個別指導を強化し、就職活動状況の把握と進路指導を実施する。 関係機関との連携を強化して求人情報の把握に努める。 <p>2 キャリアプラン作成支援や「就農就業ガイダンス」等の実施</p> <ul style="list-style-type: none"> 授業や面談を通じて早期から進路に対する動機付けを行う。 「キャリアデザイン」、「就農就業ガイダンス」の授業を通じ、就農・就業への意識を高めるとともに、個別指導を行う。 <p>●評価指標</p> <p>1 進路決定率</p> <p>2 キャリアデザインの実施</p>	<ul style="list-style-type: none"> 5月下旬及び3月中旬に1学年全員の三者面談（学生、保護者、大学職員）を実施した。 学生個々の希望や適性に応じて、インターンシップの取組みや求人情報の提供等を実施した。 保護者を対象とした法人見学会を後援会と共催で7月と11月の2回開催し、農業法人等7カ所（株モリヒロ園芸、株太陽の菰、有藤川果樹園、有龍虎園、有赤松牧場、株荒川農園、空浮(合)）を見学した。 「キャリアデザイン」（1学年対象）を6回12時限実施し、自立、自己実現に向けて、コミュニケーションやキャリア形成について指導した。 「就農就業ガイダンス」（1, 2学年対象）を5回16時限実施し、雇用就農や将来自立経営するにあたっての心構え等について先進的な農業経営者等から学んだ。また、3月には就業への意識をより高めるため、1学年全員を対象にキャリアコンサルタントの個別カウンセリングを実施した。 2学年31名のうち29名の進路が決定した。進路決定率は93.5%。 	<p>A</p> <p>A</p>	<ul style="list-style-type: none"> 引続き、三者面談や個別指導を通じて進路希望を把握するとともに、進路決定の早期化を図る。また、葉ローワークや県内農業団体とも連携して、求人情報の収集と学生への提供に努める。 法人就農等への理解を深めるため、引続き保護者を対象とした法人見学会を開催する。また、修学状況を保護者と共有するため、出席及び単位取得状況について、夏季休業まで及び1学年終了時の状況を通知する。 キャリアプランの作成について、経験値の少ない学生が自ら考えるだけでなく、専門家の適切なアドバイスを受け、より広い視野で考えることができるよう、キャリアコンサルタントの個別カウンセリングを引続き実施する。 	
<p>2 就農支援</p>	<p>●具体的方策</p> <p>1 農業次世代人材投資事業等の活用促進と手続きの支援</p> <ul style="list-style-type: none"> 就農を目指す学生・研修生のための各種給付金の事務手続きを積極的に支援する。 <p>2 就農意欲の向上対策</p> <ul style="list-style-type: none"> インターンシップ等を活用して求人のある農業法人への訪問機会を増やし、雇用就農を支援する。 関係機関（普及センター、農業試験場、農業会議等）と連携し、県内外の優れた農業者による講話や最新の農業技術の事例見学等を通じて就農意欲を向上させる。 <p>3 就農相談の実施</p>	<ul style="list-style-type: none"> 7月11日に校内で農業次世代人材投資事業説明会を開催するなど、手続き等を支援し、学生7名、研修生4名が受給した。 J A香川県就農奨学金を、学生8名が受給した。 インターンシップに参加した5名のうち2名がインターンシップ先である農業法人へ就職した。 県内農業法人等を、5月30日に16社、10月2日に11社招き、校内会社説明会を実施した。（再掲） 7月3日に(株)中田養蜂 田中祐氏を招き、講話・ワークショップを実施した。（再掲） 1月21日に平成27年度卒業生6人を招き、体験談を聞くとともに意見交換を行った。（再掲） 	<p>A</p> <p>A</p>	<ul style="list-style-type: none"> 卒業及び研修終了後の着実な就農・定着に向けて在学中から切れ目なく支援できるよう、農業改良普及センター等関係機関とより強力な支援体制を構築する。 法人見学やインターンシップでは、栽培状況や雰囲気だけではなく、社長の経営理念や方針を直接見聞きできる貴重な機会であることを学生に認識させる。 専門コースにとらわれることなく、幅広い分野の職場が体験できるよう、選択科目としてインターンシップをカリキュラム化（2日間参加で1単位）。 	<ul style="list-style-type: none"> 地元の農業法人と協力して農大生と交流する機会を増やし、互いに安心できるように農大で学生を育成していただきたい。 農業法人は長く雇用できる人を希望しているので、インターンシップやアルバイトを経て雇用できるような関係があるとよい。 アルバイトで農業法人と結び

